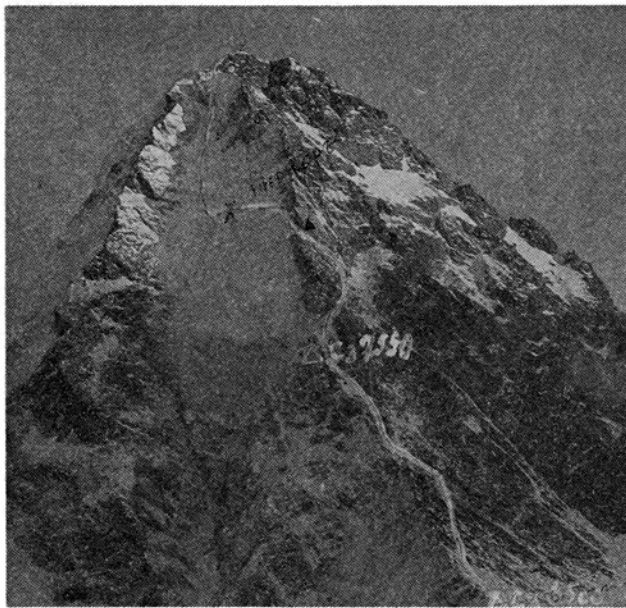




チヨゴリ峰(8611m)北面; C3=7550m

テントから抜け出して外に出ると、昨夜までの強い風は止んで、漆黒の空には天の川を形作る無数の星が輝いていた。暖かいシチュエから出たばかりの体には、寒気がひどくしみた。この第三キャンプ(七五五〇m)とほぼ同じ高度のスキャンカンリ峰が開の中に一際黒く沈んでいた。それと対照的に開に白く浮び上がっているのは、今日これから登るべきチヨゴリの大雪山だ。頂上まであと一〇〇m。高所を少しでも経験した者なら判るだろう。この高度差がどれほど長く、どれほど困難かを。カラコルムの短い夏が終わって、秋風が吹き始めていた。残された最後のアタックチャンスかも知れなかった。幸いに天気は申し分ない。簡単な朝食をとって、気合いを入れて出発する。C3以上は十日以上もトレースしていいないので雪が深い。腰まで潜ってしまい実に辛いラッセルだ。しかし、たと

え途中でつぶれても後続の三人の誰かが頑張ってくれるだろう。二ピッチ登って北西壁側に回り込むと風が強くなった。十時ちょうど七八〇〇mの北壁の大雪山壁に入る唯一の通路となっているコルに到着する。ここから先は、北壁の右側、つまり北稜の左側壁を巻くように登って行くことになる。雪はそれほどぐらぐらず歩き易い。正午過ぎ、八千mのフィックス終了点に達する。ここから先は、自分の技術と精神力に頼るしかない。あと六〇〇mの登攀が待ち構えていることを考え、ザックをデポすることにした。八千mの高所では、たとえ五mのザックでも恐ろしいほどの重量感だ。ピッケルとバイルを握り直し氷壁にルートをとる。足下には

山をきれいに「ミ」は持ち帰ろう

留守番電話(電話番員一六六五九) 三千mの絶壁。上はガラガラと輝く蒼水。かなりの緊張感とリズムは、恐怖とか不安を越えて存在するものだ。動作に無駄のないように登ることを心掛ける。疲れは不思議と感じない。リードしているということ、傾斜がきついということ、緊張感が保たれているのである。しかし、やはり長い。登っても登っても両側の風景は依然変らない。永久にこの動作を繰り返さなければならぬような奇妙な錯覚に陥ってしまう。しかし、遂に大雪壁の先端に達した。高度八五〇〇m。柳沢君がついて来た。吉野、尾崎両君の姿は見えない。右奥に望まれる岩峰が頂上のようなうだ。あと高度で五〇〇mくらいかと思っ

チヨゴリ

最後の無酸素一〇〇m

坂下直枝



1982年(昭和57年)

11月号(No. 449)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- チヨゴリ最後の無酸素 1100m
坂下直枝……………(1)
難渋したマッターホルン第九登
路坂順……………(2)
チヨゴリの遭難に思う
片山全平……………(2)
ドイツ山岳会の近況
岡沢祐吉……………(2)
ロブソンへの道で学んだこと
塚本幸子……………(3)
図書紹介……………(5)
「Everest」「上高地物語」「山嶽寮」
「友情」
1983年度ソ連国際キャンプ開設
海外委員会……………(6)
安曇平、三郷村の播隆
小林俊樹……………(8)
東西南北……………(9)
報告 東北各県支部、北海道支部 ……(10)
お知らせ……………(10)
ルーム日誌・会員移動……………(10)
カット/松本慎太郎・吉阪隆正

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

然マッシュルームの黒い岩壁が見えた。頂上だった。チョゴリの鋭い山容から想像していたのとはあまりに違う頂上だった。どこが本当のピークか判らぬような幅の広く長い雪稜の頂上。やはり頂上は、ジャヌーのように鋭く尖っていた方が良いのだが、まあぜいたくは言うまい。眺めもこれまでで一番のものだし、第三キャンプから、ずっとリードして登れたのだから。「さあ、早くC3に帰ってお茶でも飲もうぜ」と柳沢君に声をかけた。翌日、厳しいビバークの後、彼がスリッパして消えてしまふことも知らずに。

難渋した

マッターホルン第九登

脇坂 順一

八月二十四日五時四十五分ヘルン小屋を出発。食堂で既にアンザイレンする。外に出ると満天の星空で三日も見られ今日の天気は良さそうである。風もそう強くなくヤッケも不要だろうとのこと、少しでも荷物を軽くするため小屋に置いて来た。小屋を出て約一〇〇メートルのところで岩壁に取り付く。岩がツルツルに凍っていて慎重に最初の難所を登り切り、左へ巻いてノーマルルートの上稜の長い長い岩壁を攀じて行く。急斜面には適所に太いピンが打ってあるので、これを利用してガイドのHさんと互いに確保しながら登りに登る。ソルベー小屋直前の難所も無事登攀。ここで五分間休憩。この頃から少しガスがかかって来る。ソルベー小屋直上の急斜面を登り切った頃から小雪が降り出した。その中、吹雪となり、風も強まり、雷も鳴り出した。こんなに

天候が激変するとは全く思いがけないことだった。幸い雷雲はそう近くではなさそう。しかし吹雪は一向に止みそうになく、かなり冷えこむので比較的安全な場所ですぐ防水アノラックを着る。せっかくなので登ったのに諦めて引き返すのもつたいない。今後数日は登攀不可能であろう。Hさんも、行けるところまで登ってみようとのこと登攀を続ける。自然に速度が落ちる。氷雪が固くなって来たので急斜面の一角でアイゼンを苦労して付ける。ヤッケをヘルン小屋に置いて来たのが悔まれるが致し方ない。いわゆる肩の部を過ぎ、最初の太いザイルが下がっている場所で、昨年は初めてアイゼンを付けたことを想起する。滑り止めのゴム付手袋をしているのでザイルを持つ手が滑ることはないが、体を持ち上げるにはかなりの腕力を要

チョゴリの遭難に思う

片山 全平

「死者にムチ打つ」と受け取られると心外なのだが、あの輝かしい無酸素でのチョゴリ初登はんは、一抹の冷風を感じさせるとすれば、柳沢隊員の遭難死である。同隊員の死を無にしないためにも一文を掲げた。

登頂の経過は、山と溪谷、岳人、朝日新聞に報告されているので述べないが、はじめ柳沢、尾崎両隊員が登頂の第二次隊に回されたことで心理的に反発が生じ、それが小西ブランに破綻をきたしたということがまず第一に上げられる。この結果、坂下、尾崎、吉野、柳沢の四隊員が第一次隊として、十四日の快晴を利用してC3からいっ気に登頂を狙ったのだが、ソロのあたりで先陣を争った。その夜、八三〇メートルの高所でのビバークは、ビバーク態勢も不完全なままだった柳沢隊員の肉体的疲労に響き、スキ間風のように、この弱点に向けて死がしのび込んだ。第二次隊が完璧な登はんを行なっただけに惜しい。

八月十三日と、ぎりぎりまで隊は追い詰められた。それだけに小西登はん隊長は、第一次の四人の自由な登高に賭けたらどうかは、想像に難くない。が、時期的に追いつめられた時点では、計画本来の無酸素、全員登はんの方策は捨てて、一

部有力視される隊員に絞って、まず無酸素、初登頂を果たし、彼らの帰還の見通し、十五日の天候の良悪を見極めて第二次隊をという二段構えのプランを打ち出せなかったものか。メンバーに徹底できなかったものか。

山学同志会のカンチェンジュンガ無酸素登はんは、チーム・ワークのいい同会のメンバーによって達成された快挙であった。今回はその点で事情を異にしている。個々の自由な発想で登はんにつけさせることは、余程チームのなかの個々の隊員の気心と隊員のコンディションを掌握していないと危険が伴う。一度狂うと取りかえしのつかない事態を招く。

話はそれで恐縮だが、いま管理社会という言葉がはやっている。西武ライオンズは広岡監督の徹底した管理野球でパ・リーグの初優勝をもたらした。日本ハムの大沢監督の人情野球とは対照的だった。どちらに軍配をあげるか判断に迷うところだが、私自身は「管理」という言葉には反発を感じる。しかし野球は勝ち負けだ、登山は死を伴う問題がつけまとい余程慎重に運ばなければならぬ。

アルパイン・スタイルが時流に乗っている今日、欧米の強烈な個性と、強靱な肉体を持つ登山家の業績につられて、日本登山家にいきなり適用することは必ずしも好結果を期待することはできない。他のスポーツを取り上げても、欧米選手と比較した場合、筋力とスピードでかなりの開きのあることを痛感しているからである。

ドイツ山岳会の近況

岡沢 祐吉

今回、ドイツ山岳会(DAV)の本部(ミュン

ヘン)と二、三の支部を訪ねたので、最近のドイツ山岳会の様子などについてお伝えしたい。なお、今から十二年ほど前に吉沢一郎さんがミュンヘンにあるDAV本部を訪ね、その訪問記を会報の284、285号に写真とともに載せてお

する。昨年は天気も良く、氷雪も少なかったせいか楽に登れたところでも、今年は実に苦勞する。鎖とザイルを両手で持って体をずり上げるところでは何回目にやっ



と腕の力を振り絞って登ることが出来た。手がかじかんで力が入らぬのだ。

ザイル頼りの急斜面岩壁の登攀をやっと終えると次は氷雪の急斜面である。ジグザグに登って行く

ロブソンへの道で

学んだこと

塚本幸子

ロブソン北壁をのぞむバーク湖への道は、ともかく自分の足で歩かねばならない。食料、テント、シュラフなど一切自分で運ばねばならない。このことは山登りでは

が、いつもより随分長い感じだ。十一時四十五分辛うじて頂上に着く。これまでで最も時間を要した登攀でかなり疲れた。一時ガスが切れてイタリア側頂上の十字架が一瞬見えただけでカメラに収めようとしたが再びガスの中に消える。吹雪は一時治まったようだが全然晴れそうになく風も強い。良い写真も撮れるはずがないので下ることにする。今年も日本人六名を含む十数名の遭難者を出した岩壁である。ゆっくり慎重に下ることにする。Hさんが常に確保してくれていて安心だ。ソルベー小屋で一休み、サインブックにサインをして再び下降を始める。ヘルンリ小屋はすぐ下に見えるのだが、なかなか長い道程である。最後の難所を下り終え小屋に帰着。結局登りと同じ時間(六時間)を要した。これまでで最も難渋した登攀ではあったが、満六十九歳の体でどうにか完登出来たことは何よりの喜びであった。

あたりまえのことであるが、実際に歩きはじめて更に大変なことに気付いたのである。

食事をすれば残菜がでる、生活すればゴミがでる。それらを跡を

いでなので、お手持ちの方はこの機会にもう一度見ていただけると、より良くご理解頂けるものと思う。

DAV本部の建物はその頃と同様、イザール河畔にあり、三階建の外観もそのままである。ただその中で働く職員の顔ぶれは、当時と大分変っているらしいのが皆の対応の仕方でもわかった。その他にも様々の資料がマイクロフィルムに納められ、整然と並べられていたり、マイクロコンピュータが導入され、ドイツ全土に散らばる二九〇支部と、約四〇万人に達する会員を掌握するため使われているのは、大きな変化に違いない。「世界最大の山岳会の一つだ」とDAVが誇らしげに言うのもっともかもかもしれない。

現行の年会費は平均すると成人会員が一人約六〇マルク(日本円で約六千円)であり、このうち約三八%が本部へ納入されるため、一年間に一億円近い本部会費が支部から振り込まれてくる。この点だけ取り上げてみても、コンピュータを入れたのは当然だろう。

本部と支部との会費の配分割合がだいたい四、六で、本部が四、支部が六となっているらしいが、その経緯は不明だった。このためベルリンで会ったベルリン支部の人は、本部と支部の会費配分について不満な様子だった。ベルリン支部の会員は約六千人ということで、大きな支部の一つであるから、この不満は支部を代表する意見と言えるかもしれない。

山岳会本部で働く職員の数、私の写真に写っただけでも十人はいから、全部で十五名ほどはいると思う。この職員で各支部や会員へのサービスも行っており、会誌の発行、地図の作成(簡単な印刷は地下の印刷所で行なっている)、図書や登山用装備の購入、その他会員からの問い合わせにも応じ、雪崩について、積雪に

ついて、地域ごとの天気予報についても情報を提供している。

図書館もこの建物の中にあり、グラスラー会長の話だと蔵書数は約四万冊とのことであった。私が見たDAVのパネルレットには蔵書数約三万二千冊とあったが、何ごとにおいても、その優れた面を見せようとする様子が同会長の話からうかがえたので、この点はそのままにして置いた。館外貸出しは会員のみが対象で、非会員は閲覧だけ自由に出来る。私の行った日は平日であったが、七、八人の閲覧者がいた。若い人も年配の人も、女性も混じっており、幅広く利用されている様子だった。閲覧室はあまり大きいものではなく、十五人くらいで満席となるほどの広さであった。図書専門の老夫婦と、脚立に乗って重い本を上げおろし出来そうな屈強な青年一人が働いていた。JACの図書室より本の数も多いし、専従職員もいるのだが、何となくガサガサしており落ち着いて本が読める場所だとは思えなかった。この点はベルリンで会った新聞記者のブリンクマン(DAVベルリン支部会員)氏も同じらしく、日本に来た時に見たJAC図書室はすばらしかったと言っていた。

日本から送られて来た図書も書架の上の方に並べられていた。わざわざ「山岳」の最近のものを出して私に見せてくれ、一九五一年からは全部揃っていることや、英文の報告が参考になることを話してくれたが、韓国の本まで一緒に持ってきてあり、この話は多少引き受けて貰った。

DAVで発行する二万五千分の一地図は殆ど山小屋のある地域のオーストリアに属するもので、オリエンテーリングにも利用しているようである。最近ではナンガパルバートのようにドイツ隊のよく遠征するヒマラヤの地図も発行し

残さないため、カナダの野生動物を保護するため持ち歩くことになる。

夜になれば、これをベアープルーフといつて熊よけのための高い木にかけられた棒につるして、次の日にまた、すべておろして持つて歩くことになる。ゴミは毎日増え、食料は減るが、その割には荷物はあまり軽くない。

私達は、キャンプ地の近くに川が流れていても飲料水以外に水を使うことはほとんどなかった。あまりにも清い流れであるだけに、だれもが川や湖の水を飲み水として疑うことなく口にする。それだけに顔を洗う気にもならなかった。

食器にはお湯やお茶を入れて洗って飲み、あとはペーパーでふくことになる。

日本のキャンプ地ではゴミ箱があっても、そのまわりはゴミがあふれハエが集まっていることが多い。トイレもまわりに臭気を放ち汚れ、ここにもハエが群がる。近くの川も残菜でうすすぎたなく、とても生水が飲めるようなところはない。たとえその水をわかしとしても臭もちがわるい。

カナディアン・ロッキーのキャンプサイトやトレイルの何箇所かには、一間四方くらいの木造のトイレ・ハウスが建てられている。ドアを開けるとまん中に便器が一つあってふたがあり、天井には青

いプラスチックの板がはられ便器の中への光線がさえぎられている。そして、必ずスベアのペーパーも絶えず補充されている。ほうきも一本あって誰でもはけるし、トイレの中にはハエ一匹いないし、かすかによい香りをただよわせていて快適である。ある日、ねむる前にトイレのペーパーが残り



バーモント州のグレン・エレン／古阪隆正

わずかだったのに、次の日の朝七時頃にはもう新しいペーパーがあった。

これは森林保安官(ワーデン)が朝早く見まわっているからであ

っている。一部六マルク程度で誰れでも購入できる。

地下にある倉庫は十二年前と同じで、小さな登山用具店もかなわないような様々の道具が棚にいっぱい整理されてあった。ヘルメットもビッケルも夫々五十点近く置いてあった。倉庫の入口に掛けてある古い遠征隊の写真が私が見ていると、彼らの使用したものも全部ここにしまつてあると説明された。

DAVの安全研究会では、市場に出回っているあらゆる道具類がテストされ、また事故の起きた時にはこの原因を究明し、会員にその結果を知らせ、より安全な登山を心がけているそうである。地下の小さな部屋に、曲がった数本のパイプ・ハーケンがあったが、そこで損傷テストが行なわれたようだった。

DAVの会員は入会する時、それぞれの好みに応じて山登り、ハイキング、国外旅行グループに属し、年令に応じて少年、青年の各グループに属するようになっていた。

特に注目されるのはユーグェントと呼ばれる青年のグループで、十四歳くらいから二十四、五三歳までを対象としたこのグループが、DAVの中で大きな組織をなしていることである。この点はスイス山岳会でも同様だが、DAVの会員四〇万人のうち約八万人がこのグループに属し、彼らの納める会費は日本円にして僅か二千五百円とまりである。各支部にはこういった青年を対象としたプログラムが独自に作られており、山を媒体として、DAVの適任者が彼らを、歌ったり映画を見たり、ゲームをしたりしながら山登りはもちろん自然を守ろうといった態度も学べるように指導していく。DAVの潤沢と思われる財源の七割くらいが職員の人件費であるとしても、それ以外のものが青少年の育成に積極的に用意されている点は注目してよい点だ

ろう。昔ヒットラーユーグェントという言葉に耳にしたことがあったが、青少年の育成はどの時代も重要な課題であるに違いない。

ミュンヘンにある登山用具メーカー、サレワの支配人、フーバー氏は日本にも来たことがあり、穂高岳にも登ったそうだが、ツークシュピッツェに掛けてある長い鉄梯子の写真が指しなから、なぜ岩登りの盛んな日本にこういった施設がないのだらうと私に尋ねた。岩登りとは関係なく、どちらかというとフィールドアスレチックに近い設備のような感じだが、垂直の断崖に掛けた数百メートルは続くと思われるこの鉄梯子を見て、ヒマラヤの垂直に掛けた縄梯子が思い出された。青少年向けの設備である。

DAVの経営している登山・スキー学校は、会社組織になっていて、ここでは基礎的なものから世界各地へ出掛ける遠征も扱いかい、夫々の登山者やスキーヤーの希望に答えたプログラムを作っている。この学校のカリキュラムとDAVの海外遠征とは常に連絡を保ちながら行なわれており、トニー・ヒーベラーなどは自分の編集している雑誌『デア・ベルクシュタイガー』で使用する資料のコピーをDAV図書館に提供し、海外遠征の役に立つよう協力している。しかし、世界各國の登山者から資料を集めるために、トニー・ヒーベラーもDAVを利用していろいろである。この依頼に答えた日本人登山者からの最近の報告を一部見せてもらった。そしてヒーベラーは「僕は日本山岳会の仕事もしているわけだ」と言っていた。「その報告は今年度の『山岳』に載るだらう」と言っているのはその場を凌いだ。DAVが興味を持つ登山にJACGが興味を持つ必要があるわけではないと思うが、また同時に、外国で認められれば日本でも認められるという考えが日本人に定着しているのだろうか、とふっと思ったりもした。

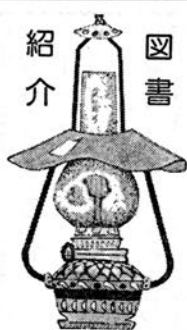
る。ワーズは制服、制帽で山を
 かつ歩いていた。登山者やキャン
 プ地を見まわって助言するだけで
 なく、トイレの清掃もやっている
 のだということがわかって、あら
 ためてカナダのすばらしさを知っ
 たのである。

多くの人間であふれる日本では
 大変なことかも知れないが、自然
 を守るために日本もカナダのキャ
 ンプのあり方を学ぶべきだと思
 う。

「花をとってはいけません」と、
 双眼鏡でのぞいて叱るだけなし

図書

紹介



EVEREST

by Walt Unsworth

エヴェレスト登攀史を詳述する
 には、これくらいの冊子が必要なの
 だろう。一五・五×二二・五の
 ミニディラム版で五九〇ページ、
 その一ページ当り大体五〇〇語と
 見て、まず総計三〇万語近い内容
 が盛りこまれていることになる。
 写真版もカラー十七葉、モノクロ
 ーム五十五葉、地図、図版など九

に、この自然をこわしてはだめだ
 そっとしておこうとする気持ち
 わいてくるように指導する人々が
 必要だと思う。しかも、その仕事
 にたずさわる人々が、たとえトイ
 レを清掃しても、自分達の仕事に
 誇りを持てるよう、生活が十分保
 障され、職業として認められるこ
 とが必要であらう。私はロブソン
 への道で、野生動物をはじめとし
 た美しい自然に対し、いつくしみ
 の心でその保護が考えられている
 ことを知った。

枚が挿入されて、文字通りの「大
 著」である。

著者は、登山関係の著作を数多
 く制作しているのにおなじみのウ
 オルト・アンスワース氏。近年は
 出版社を経営し、小型ガイドブッ
 クなどで大変な景気だと伝えられ
 るが、今回の「大著」は、この著
 者として一つの野心作であつたろ
 う。

本文は十九章と短い追録から成
 る。第一章は、コンウェイやデン
 トなどの先駆者が、エヴェレスト
 登頂へ眼を向けた前世紀後半の話
 ではじまり、終りの第十九章で
 は、メスナーとハーベラーによる
 無酸素初登などが記されている。
 その間、英国主導による戦前の
 エヴェレスト遠征については、第
 二章から第九章まで、一〇〇ペー
 ジ近くにわたって詳述されてい

いずれにしろ大きな組織で動くDAVには三
 百からある山小屋の経営が関係しているのでは
 ないか、と日本の現情を見て短絡的に考えてし
 まうのだが、ドイツの場合これは当たらないよう
 だ。濃厚なグラスラー会長の話し振りは大変魅
 力的であったが、DAVの優れた面だけが伝わ
 って来たため、裏側にはわからなかった。それが
 ベルリン支部のカレンベルグ副支部長の話し
 で、山小屋の経営は容易でないということがわ
 かった。

その話では、山小屋の宿泊費は会員が一〇マ
 ルク、非会員が二〇マルク、とJACの山研使
 用料よりも安いのである。勿論食事代は別なの
 だが、この安さは採算割れを起こし、来年度か
 らの会費値上げ(年七〇マルクとなる)の大き
 な要因になっているとのことだった。本部への
 納入分約三八%は山小屋再建の時の無利息積立
 金と同じで、修繕費、維持費、山小屋近辺の登
 山道の整備費、自然保護に関する費用など一切
 は支部で賄わねばならないという。ベルリン支
 部の場合、山小屋のほとんどはオーストリアに
 あるため、必要なものはオーストリアで調達す
 るのだが、オーストリアからは何の補助もない
 そうである。「山小屋がなければそれだけ苦労
 が少ないわけだ」と日本山岳会の現状を半ばう
 らやましがるように話していた。

山岳会を一つの企業体と考えると、そこにも
 損益分岐点のようなものがあると教えられたこ
 とがある。会員数がある人数以上になると、会

員増がすぐ財政の潤いにつながるという点があ
 るとのことである。DAVはそのよい例かもしれ
 ない。

では会員数を増やす方法は何かといった基本
 的な問題が残った。DAVの場合の一つのヒン
 トは、入会を誘うパンフレットの中にあるよう
 な気がする。前述のユーゲントを対象とした箇
 所に「われわれが意図するところは、山に登る
 ことだけを目的とするのではなく、青少年に自
 分の持つ可能性を自分で発見させることであ
 る」とあった。

登山を純粋なスポーツとして扱ったヨーロッ
 パ人の伝統がこの言葉に集約されているように
 思う。登山をデニスやサッカーなどのスポーツ
 と同様に扱えるためには、これらのスポーツに
 匹敵する層の厚さが必要であり、そのためには
 安全面で必要以上に気を配らねばならないわけ
 である。会員になると同時に山岳保険に入るシ
 ステムもこの考えの延長上にあると言えるだろ
 う。

DAVの人々との話の中から山登りのため
 に自分の生活を犠牲にするといった姿勢は読み
 とれなかった。彼らの実情からは日本人登山者
 がなぜあのように数多くヒマラヤに押し寄せる
 のか理解できないように受けとれた。

以上、おおざっぱにお知らせしましたが、出
 来れば「山岳」誌上でももう少し別のこともお伝
 えしたいと思っています。

ドイツ山岳会の近況

る。大がかりな遠征の舞台裏が、
 地学協会やアルパイン・クラブ所
 蔵の資料にもとづいて明らかにさ
 れ、珍しいエピソードの類も少な
 くない。

戦後の遠征については第十二章
 緯が記されている。ハント隊によ

る初登頂は第十四章に述べられて
 いるが、これは周知の話の域を出
 ていない。第十五章は中国隊によ
 る北面からの遠征について、第十
 六章は一九六三年までのスイス、
 インド、米国等による諸遠征、第

ソ連国際キャンプ開設

一九八三年度

ソ連国際キャンプ開設の案内

中央パミール、コーカサス、アルタイ、西部天山の地区で、パミール83、コーカサス83、アルタイ83、チムガン83の四つの国際キャンプが開設される。外国の登山家達にとって、ソ連の最も興味深い山岳地域を訪れ、パミール、コーカサス、アルタイ山群の最高峰を登頂する機会が開かれる。

「パミール83」は二つの三十日間のプログラムがあり参加者には、七月十一日、十三日、十五日にモスコに到着していただく。

モスコでは、劇場、博物館、サーカス等の見物ができる。

モスコからオシエ(キルギス共和国)まで飛行機を使用し、そこからバスでレーニン峰の近くのアチク・タシ谷のベースキャンプに入ります。

プログラム(1)

アチク・タシ(三七〇〇呎)のベース・キャンプからレーニン峰(七三四〇呎)、第十四回CPSV会議峰、或いはザライ山脈(五〇〇〇〜六〇〇〇呎)の峰々へ登頂することができる。高所登山の経験の充分でない登山者は、経験を積んだガイドの指導のもと訓練を受けることも可能。

モスコ到着は、七月十三日と十五日にセットされており、帰国は八月十一日と十三日、費用は一二〇〇米ドルである。

プログラム(2)

「アチク・タシ」ベース・キャンプより、参加者は、登頂したい山により、二つの登頂キャンプのどちらかにヘリコプターで飛ぶ。それ等のキャンプはフォルタンベック水河に設けられている。

二つのうちの一つのキャンプはフォルタンベック水河にある。このキャンプからコムニズム峰(七四九五呎)を簡単なルートで、また、E・アパラコフ峰、スローエフ峰、或いはピョートル大帝山脈の他の峰々にも登れる。

もう一つのキャンプはモスクヴィンとワルター氷河の合流点にある。このキャンプから、コムニズム峰や、E・コルジエネーフスカヤ峰(七一〇五呎)をさらに難し

いルートから登ることが出来る。

モスコの到着は七月十一日と十三日にセットされている。帰国は八月九日と十一日。

このプログラムの費用は一三〇〇米ドルである。パミールのすべての山の登頂及び特にプログラム(2)の山々の登頂は、充分な肉体的訓練と山の経験が必要とする。

この第二番目のプログラムでは、八名以上の高度な登頂者グループが、コムニズム峰の南面からペリヤーエフ氷河地区へのルートをとることができるが、この登頂は前以て調整する要あり。

ペリヤーエフ氷河にむかう参加者の総数は十六名以上を必要とし、コース費用は二〇〇米ドル。

また、このパミール・キャンプは、ハイカーのグループも受け入れていて、プログラムは、キャンプが開設されている地域に行くなど、バラエティに富む。

追加料金を払うことで、中央アジアの街サルカンド、ブハラ、タシケントへの五日間の旅行もある。アチク・タシから中央アジアへの出発は、八月七日、或いは八月九日。

モスコからの帰国は八月十三日、或いは八月十五日である。

この中央アジア旅行の費用は、三〇〇米ドルである。

「コーカサス83」キャンプのプログラムは一つで、プリ・エルブルース山群地区で開かれ、ソ連滞在期間は総計二十四日間で、キャンプは二組の交替受入制で運営されている。登山者は、困難度の色々なカテゴリーに分けて登ることが出来る。ウシバ、シニケルダ、チャティン、ウル・タウ・チャナ、ドングズ・オルン等の有名な峰々がある。最も興味深い登山の一つに、ヨーロッパの最高峰、エルブルース峰(五六四二呎)登頂がある。

ハイキング・グループのためには、コーカサス山脈の峠を越えて、魅力的な山岳地域、スヴァネチア、アズル・ス峡谷、またその他、絵のように美しいプリ・エルブルース地区へのトレッキングも用意している。

最初の受け入れのモスコ到着は七月四日で、帰国は七月二十七日である。

次の組の受け入れは、モスコ到着が七月二十八日、帰国が八月二十日。このプログラムの総費用は、八

十七章は一九六五年以降のこと、ここで始めて日本山岳会の遠征隊が採りあげられている。エヴェレスト西南壁の偵察にはじまり、本隊による同ルートの登攀経過が、かなり詳しく記され、とくに著者は、日本隊が、この新しいルートに着目したことの意味を、エヴェレスト登攀史の上で高く評価している。それは、一九二二年のマロリーたちによるノース・コ

ル經由のルート、一九五一年のシブトンによるアイスフォール突破の南面登路の発見に匹敵するものという評価である。大塚登攀隊長の見解も紹介しており、著者の関心が相当のものであることが示されている。

次の十八、十九両章は一九七二年以降の登攀に当てられ、女性として初登頂の田部井さんの業績も記されている。

以上が本文の大きな内容紹介であるが、これに次いで、さらに一〇〇ページ近い付属資料がある。もともと学術的な本ではないので、この資料には役に立つものは余りない。ただ、詳しい文献目録の一部に新聞、雑誌に掲載されたエヴェレスト関係資料がリストアップされているのはありがたい。

この著作をひもといて、不便だなと感じることが一つある。本文各章の題名が、いささか凝りすぎというか、気取りすぎというか、

一見ただけでは、各章が扱っている内容を察知できない点である。とくに引用符つきの題など、出所をたどると他の著作からという次第で、少なくとも副題で一応の具体的な内容がつかめるような配慮が欲しかった。

著者自身は、本書を一貫した叙述として通読してもらおうつもりで書いているから、各章のタイトルを魅力的にしたのだろう。

しかし読者の側には、この大冊をあちこち必要に応じて拾い読みすることも多いと思われるので、索引とは別に、右のような配慮があればよかったなと痛感するわけである。

London: Allen Lane, 1981.

¥14.95

上高地物語

— その歴史と自然 —

横山篤美著

上高地といえは北アルプス、槍、穂高連峰と連想し、山を愛するものは上高地のこの雄大な大自然の姿に魅せられ二度三度、いや毎年、或いは四季を通じて訪れ、その数は年々増えている。その上高地についての紹介図書や写真集等は非常に多く出版されている。その中でも本書は表題のとおり、山岳図書としても将来の上高地についても貴重なものであり、後世に

〇〇米ドルである。

ここではコーカサス滞在中、追加料金を払うことで、グルジア共和国軍用高速道路にそって、カズベグ村に行き、カズベグ峰(五〇四三米)に登る五日間のツアーも可能。費用は一〇〇米ドルである。

「コーカサス83春期」キャンプは山岳スキーヤーのために、プリ・エルブルース地区で開かれる。このプログラムも二つの交替受入制で運営され、ソ連滞在期間は十七日間である。またこのプログラムには、三日間のモスコ滞在中も入っており、チエケットやエルブルースの斜面をスキー滑降する以外に、エルブルース峰を登って滑降したり、或いは、一―二級の他の峰々を登って滑降するプログラムも加えられる。これ等の登頂プログラムは冬期の状態により、前以ってキャンプ事務局でよく調整する必要がある。

最初の組のモスコ到着は、二月十九日で、帰国は三月七日、山岳地域の滞在期間は二月二十日から三月五日までである。

第二組のモスコ到着は三月六日で、帰国は三月二十二日。山岳地域の滞在期間は三月七日から三月二十日までである。このプログラムの費用は六〇〇米ドル。

「コーカサス83春期」キャンプの五月は、ヨーロッパの最高峰、エルブルース峰からスキー滑降するには一年で最もよい季節である。この期間中、山岳スキーヤーのキャンプは、プリ・エルブルース地区に設けられる。プログラムは十七日間、三日間のモスコ滞在を含み、他の諸峰に登ることも可能。このプログラムも前以って十分に調整すること。

モスコ到着は、五月五日で、帰国は五月二十一日。山岳地域の滞在は、五月六日から五月十九日までで、費用は六〇〇米ドル。

コーカサス滞在中、グルジア軍用高速道路にそって、カズベグ村まで行き、カズベグ峰(五〇四三米)に登る五日間のツアーも出来、費用は一〇〇米ドル。

「チムガン83春期」キャンプ 山岳スキー地域のチムガンは、ウズベック共和国の主都、タシケントから七十五料のところにあり、最高峰は大チムガン(三三三三米)。

風もなく日当りのよい日々が多い上に、多量の雪があり、この地域はスキーヤーや、登山家、ハイカー達に大変魅力的な所である。

チムガン滞在者は、三―四級の登頂とスキーを組合わせる機会も得られる。

チムガンのスキーヤーは、随意にチエプリフトや、十二基のロープトウを使って、様々に広がるスキーコースに行ける。

すべての参加者は、一六〇〇米の高度の、あらゆる設備がととのった快適なホテルに泊れる。

このプログラムは、更にタシケント、プハラ、サマルカンド行きの四日間のツアーを含み、八日間の山岳地域滞在中も十五日間となる。

モスコ到着は三月一日、帰国は三月十五日にセットされ、費用は七〇〇米ドルである。

「アルタイ83」キャンプのプログラムは二十四日間。モスコからの参加者は飛行機でバルナウルまで行き、そこからヘリコプターでアルタイの最高峰、ベルーハ峰(四五〇六米)の北斜面から流れるアツケム川の峡谷にあるベースキャンプまで運ばれる。色々な難易度の、様々なルートをとってベルーハ峰に登頂するほか、参加者はこの地域の他の諸峰に登ることができ、大森林の峠を越えて近くの谷へ行く興味あるハイキングも可能。ユニークなシベリヤの大森林や絵のように美しい湖や河、驚くほど豊富な植物群や動物群等は、ソ連のこの山岳地域を訪れる旅行者に忘れがたいものとなる。

モスコ到着は七月二十二日、帰国は八月十四日、費用は一五〇〇米ドルである。

以上のプログラムの費用は、ホテル、食事、ソ連内への運送(荷物を含む)、医療費、登頂ルートの指導、救助、リフトの使用料、娯楽番組、その他のサービスを含んでいる。(つまりソ連内は割引費用となる。もちろんソ連側は、ソ連までの、またソ連からの旅費、並びに荷物運送の費用の支払いはしない。)

参加者は、自身の山やスキーの装備(暖房衣料、寝袋、ビッケル、テント、特殊な履物、スキー、ビトン等々)は持参のこと。

ソ連国際キャンプ事務局
(参加申込方法については11ページ参照)
海外委員会

永く伝えてほしい本である。

本書を読むと歴史家横山篤美翁(明治三十五年生れ)のかくしやくとされている姿に接する思いがする。深く敬意を表すると共に健康で一層の研究を続けてほしいと願うものである。

翁は安曇村に生れ、信濃において郷土史の研究家として知られ、郷土史関係の著書には上高地の開発史を始め数多くの著書がある。翁は登山家ではないが、郷土史研究家で、今度の『上高地物語』の内容は極めて正確である。

目次を見ても「上高地略年表」にしても、元禄七年の上河内から始っている。中でも珍しいのは、「山の名の決まるまで」、「上高地の開田計画」、「河童橋の由来」等々で、本書以外では知ることの出来ない貴重なものばかりである。

しかし上高地の歴史は意外に古く、戦国時代の悲話や幕藩時代の物語りも多く残されている。

また私共の忘れることの出来ない人、英国宣教師ウォルター・ウエストン師によって世界に紹介され、上高地が脚光を浴びるまでには地元の人達のたゆまぬ努力があるのであり、この歴史を辿ることによって現在の上高地の本当の姿が浮き彫り出来る。私共日本山岳会が信濃支部を中心として三十六回ものウエストン祭を度重ねられたのは多くの諸先輩の努力によるものであること言うを待たない。

著者は本書の中でこう申されている。

「私は登山家でないのに、上高地の近代登山史における関係には暗いし、またこの雄大な美しい自然を伝える詩人でもない。私の書いたことはその余の事で、言うならば山を愛する皆さんに通用してない歴史の実相であり、あくまで史実に忠実なものであります。この自信から胸を張って世に贈るものであります。」

普くこれが世の諸兄の、より多くの人の上高地を愛するようになれば本望であります」と結んでいる。私は、上高地の歴史を知るよう一人でも多くの山仲間が皆さんが本書を読むよう願う次第です。

昭和五十六年十月発行 信州の旅社刊 松本市開智二―四―三

十六 二一五頁 定価一、二〇〇円 送料二〇〇円 (蒲生明登)

山 嶽 寮

越田和男編

旧制甲南高校、甲南大学山岳部のOB会である甲南山岳会の機関誌である。今回その創立五十周年記念特別号として発行された。

創立五十周年記念行事、思い出の山・思い出の山岳部、追悼、紀

行・随筆、会員通信といった型通りの内容にまとめられているが、田口二郎氏の「甲南の山登り」と「アルパイン・クラブの猛者達」、N・E・オデル老の話から」の二編は読みごたえがある。

古きよき時代の山登りの有様がよく浮きぼりにされており、北穂高滝谷の開拓期、伊藤憲と浦松佐美太郎、そして早稲田の名クライマー、出牛陽太郎などのエピソードは、これまでに全く私など知らなかったことだけに面白く読んだ。ことに出牛を評して尾崎士郎の「人生劇場」から抜けたような人物としてあるのは興味深い。徳沢での伊藤憲と浦松佐美太郎の出会いも初めて読むことであつた。

昭和五十六年十二月 甲南山岳会発行 タイプ印刷 百ページ (山崎安治)

友情 〇十〇

日韓交流登山

一九八一年十月

書名どおり、韓国岳人の友情に支えられた報告書である。すべてが良好とはいえない難い関係の隣国である現在、人と人の触れ合いを基にする交流登山の報告書の表紙に、ハンダグ文字で「友情」と記されているのは象徴的である。全体を一読して、雪岳山の高さから

安曇平、三郷村の播隆

小林 俊 樹

天保六年冬、播隆は三郷村上長尾の阿弥陀堂で越年している。凍傷で失われた右足指の傷が、自然に癒えるのを待とうとしたか、傷のため美濃への歩行に自信がなかったのかはわからない。与一右衛門の記すところは「播隆上人、当冬年越シハ当国ニテナサレタキ段仰セ候ユエ、サイワイ上長尾阿弥陀堂アキ候ニツキ、与一右衛門世話イタシ、十月二十三日オイリナサレ、同年越シナサレ候」である。凍傷後わずか二十日しかたっていない。

この時の滞在は長く、翌七年七月二十三日までの九カ月にわたっている。その間二月中旬には、上長尾の真言宗平福寺境内に、自然石一・八丁の六字名号碑を建立している。播隆の徳が宗派をこえて高かったあかしの一つである。

もっとも、この名号碑建立にかこつて、村人たちは結構楽しんでたようで、上長尾の酒屋(小文治)の「書出帳」には、一月から三月まで計八回の「つけ」の記録がある。そこには「正月二十七日、名号石取り行きの時、酒一升、代百三十四文、夫(つかい)多源治」などある。「夫」とは酒買いの使いである。同じ二十七日に酒五升と別記してあるのは追加分と思われる。二月六日の「相談の時」は一升五合、二月十三日の「名号石立たる時」は二升の酒を飲んでゐる。つかいは才治とある。すべて人数はわからない。三月一日の「棟上げの時」はさすがに多く、最初に一斗、ついで追加分三升が記されている。播隆と村人との交流ののどかさを語る、ほほえましい記録である。

この年四月、「槍が岳講」の推進者松本新橋の海産物商大阪屋佐助は「略縁起」を印刷頒布している。喜捨の礼もかねた、槍岩エベレストを越えるまでの会員番号をもつ老若男女の隊員が、仁寿峯の岩登りを楽しんできた様子が手にとるように分かる。

このように楽しい交流登山なら私も、と誰にでも思わせる文章が続くが、楽しさの後ろには、受け入れる側の経済的、精神的な苦労も多いはずである。そのあたり



七十間にかかる鉄くさり鑄造の宣伝である。その最後には、大阪屋佐助施印の付録があり「信州松本領槍が岳の頂上、三国無双の槍岩なり。ゆえに金鎖これなくして上下いたしがたし。よって濃美三信四カ州の厚志を運び、鎖かけん。登山の安意念すべきものなり」と安全登山への願望が簡潔に記されている。

天保七年初夏、これら講中によって岐阜県関市でつくられた八本の鉄くさり、上高地湯屋の岩岡伴次郎方と、三郷村近在に、それぞれ四本ずつ運ばれている。世話人は、一日市場の百瀬茂八郎、文政四年に中房温泉を開湯した人物である。

この「くさり」について新田次郎氏は、美濃大山の城主成瀬正寿の寄進した十本と仮定して、全重量を五百五十貫(約二トン)と算出している。一本五十五貫ということになる。どういう計算をしたかは知らぬがこの重量のくさりはどうやって吊るし、どのように維持させたというのであろうか。

筆者には理解しきれぬ過大重量である。講中の血の通るような奉仕により、地域をこえ、個々の利害をこえて鑄造運搬されたこのくさは、懸垂すべの段階で松本藩に差し押えられている。原因は連年の悪天候による凶作であり、それに付随する播隆へのとかく風評であった。

ことにこの年は低温多雨、天保飢饉中最悪の凶作年である。四月から降りだした雨ははげしく、八月までつづいている。七月は七日から十二日までの六日間をのぞいて連日雨天。八月はとくにひどく、雪まじりの大雨が降り、霜もおりるといふ異常気象であった。奥羽では餓死者十万を数えた年である。「務台年譜」は「夏ノ大麦小麦ハ三分ノ一、前栽(せんざい)物残ラズ大違イ、秋稲作ハ申スニ及バズ、蕪菜(かぶらな)大根等マデ大凶作」とその惨状を記している。(本稿は中日新聞ホームサービス紙に掲載されたものを著者の了解を得て転載いたしました)

山の難しさが一層読者に理解されたいはずである。ヒマラヤ等の高峯で展開される国際合同登山といったものとは別に、交歓を主とした人の触れ合いに意義をおく交流登

の交流登山の難しさ(言葉、習慣

山には、それなりの心労も多い。物心両面で協力する人達のエネルギー量は膨大であるだけに、経済収支や苦勞話があってもよかった。そして欲を言えば同書で少し触れられているが、最近の韓国の登山の実情については詳述したものがほしかった。近年のヒマラヤ登山、仁寿峯を中心としたクライミング事情については、隣国であるにもかかわらず断片的な、あるいは個人的な情報としては知られていてもまとまりのあるものは少ないので、この報告書にその労をとってもらいたかった。若い人には、仁寿峯におけるショイナード氏の足跡を追ってみてもらえれば一層興味のあつたものとなつたであらう。

全体に、楽しくつつがなく終つた安心感からか、参加者の感想文集の体裁になつてしまつたのは惜しい気がする。もっとも数次のドイツ交流を自ら経験しながら、一つとして報告書を出していない小生にとって、今回の交流隊員の努力は素直に多量といふ。

巻末にあるルート資料、及び付録の北漢山概念図は、手に入りにくいものだけに、青年懇談会らしく、楽しさの中に、びりりと薬味をきかせたものと言えよう。

昭和五十七年四月二十日 日本山岳会青年懇談会発行 四四ページ (編川祥夫)



カモシカ同人

ダウギリイ峰

登山隊一九八二

佐々木徳雄

ご無沙汰しています。三年間の準備期間もあつたという間に過ぎ、もうミャグティコーラのBCに入つてしまいました。

私たちの隊にはJAC会員が五名参加しております。そこで簡単に隊の動きを報告いたします。

隊員 総数十八名(ドクター一名) シェルバ 七名(サード一名)、コック一名、キッチンボーイ二名、メールランナー二名、リエ

報告

東北各県支部会員親睦会と

親睦山行(秋田駒ヶ岳)

九月十一日(土)、十二日(日)の両日東北各県支部会員の親睦会と親睦山行を秋田支部担当で田沢湖町乳頭温泉郷、鶴の湯温泉を会場に、親睦山行は秋田駒ヶ岳登山として催した。

十一日午後五時集結。鶴の湯温

ゾンオフィサー一名

九月五日 隊員は高所順応トレ

ニングのため、四九〇〇、五三〇〇、とキャンプを移動し、ダンブッシュ峠、フレンチ峠を経てBC入りとする。この間四〇〇〇に集められた隊荷は、約九〇名のポーターによつてBCへ運ぶことになった。

九月二十九日 六〇三〇にC2を建設

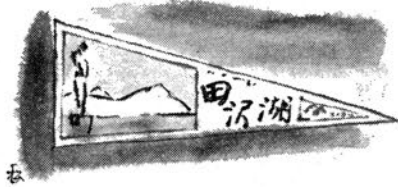
BCは四六〇〇の氷河上に建設しました。C1は五二〇〇の雪稜上です。この数日間、毎日午後になると降雪があり、翌日はラッセルや雪崩で悩まされます。C2が出来、今後ルートは直線となり、距離も短くなります。C1とC2間のアイスフォールの予想外の高度差と、悪天による視界不良に悩まされました。そろそろモン

スーン明けです。会員の皆様によりしく。(9月29日、BCにて)

かない建物が茸ぶきの屋根に囲炉裏、自在かき、露天風呂のある風情であつたようだ。

午後六時より柳谷会員自作の八ミリ映画、「鳥海登山」「秋田駒の姿」の二本を鑑賞し、親睦会に入

福田会員の挨拶、後藤会員(山形、中島会員(福島)からそれ



それこの会が催されることになつた経緯と、その必要性について話され、この会を今後も毎年続けていくことを約した。参会の佐々会長のお祝いとお願いのことばの後、参加者最年長の平沢会員(宮城、九十二歳)の乾杯で宴会に入る。

自己紹介を東京より参加の方々から始め、各県支部毎にユーモアを混えておこない、地酒と地魚、芋の子汁に舌つみをうち、二次会は、別棟茸ぶきの長屋に全員移

動して和気相々のうちに夜の更けるのを忘れておこなつた。

翌十二日は、台風の影響で悪天候が予想されたが、意外にも山は高曇り、頂上からの眺望もよく登山された殆どの会員から喜ばれた。

駒ヶ岳頂上(女目岳一六三七)では会旗を掲げ全員で会の発展を祈念して万才三唱、記念撮影の後下山した。

八合目駐車場で、「お別れの集い」をおこなつて、それぞれ帰路に着いた。

なお、青森支部結成の気運や、岩手支部会員による科学調査の資料、本部担当理事からの本部の状況報告等々をしていただき、極めて有意義な催しだったと喜んで

参加者(東京)佐々保雄、神崎忠男、坂本正智、鈴木邦之、石橋正美、大峰芳枝、久保孝一郎、山崎健、板倉健二、宮城恭一、(宮城)伊達篤郎、平沢亀一郎、岡田幸生、遠藤昭治、佐々木豊喜、庄司駒男、飯野信、高橋功、千田早苗、相沢甚平、蓬田時男夫妻、熊谷正志夫妻、千石信夫、(福島)中島正夫、古市義孝、河上銀治、野地克也、鈴木嘉、寺島昭一、水上雅、広瀬由昌、清野義美、相模八郎、清和良晴、伊藤義男、佐藤、笹川慶子、遠藤日出夫、(岩手)阿部国雄、田鎖寿、鹿野松男、和田庄司、棚田房男、小口洋右、高橋文夫、

お知らせ

◎行事案内

☆年次晩餐会 十二月四日(土)

今年はホテル ニューオータニで。
当日二時半より楓の間で「ナンダ
・コート」の映画と講演の会もあ
ります。

☆忘年山行 十二月五日(日)

年次晩餐会の翌日、三水会主催で
例年通り高尾山で行ないます。ま
た婦人懇談会の計画もあります。

☆スキー山行 一月十四日(土)

年が明けると集会委員会のスキー
山行、例年通り八方尾根で三日間
行ないます。

◎集會行事案内

☆支部懇談会 十二月五日(日)

年次晩餐会の翌日ルームで行ない
ます。総務委員会担当。

☆忘年会 今年は一、二回あります。

十二月十一日(土) 婦人懇談会
十二月十八日(土) 青年懇談会
この一年を振り返り、皆で語り合
いましょう。

☆会員懇談会 十二月十五日(水)

三水会の例会日ですが総務委員会
と合同で行なう予定です。

☆科学委員会忘年会

十二月十六日(金)

訂正

会報47号
3頁2段
目、富山
支部報告
の「播隆
上人碑は
を「播隆
博物館と
顕彰碑の
」と訂正
するよう
報告者石
坂会員よ
り申出あ
り(編集)

「高所登山における雪崩遭難」

についてのシンポジウム

主催 高所登山委員会、遭難対策
委員会、指導委員会

一、期日 昭和五十八年二月五日(土)

一五・〇〇〜一八・三〇 シンポジウム
一八・五〇〜二〇・〇〇 懇親会(会費一
〇〇〇円)

一、発表者

(一)一九八〇年チヨモランマ峰偵察隊(日本山
岳会) 長谷川良典氏、横山宏太郎氏

(二)一九七六年アラスカ・フォレイカー峰登
山隊(甲府昭和山岳会) 葦沢 剛氏

(一)一九八〇年インド・ブリックパント峰登山
隊(日本山岳会学生会部) 今野善郎氏

司会 松永敏郎氏、総括責任者 金坂一郎氏

一、申込期日 昭和五十八年一月十五日

一、申込先 日本山岳会高所登山委員会川上隆
宛お願い致します。

会場のスペースの関係で、先着五〇名にて締
切りとさせていただきます。なお、懇親会にご
出席希望の方は、準備の都合がありますので、
「懇親会参加」と記して下さい。懇親会会費は
当日会場受付にて支払っていただきます。

参加者には、三登山隊の事故状況に関する、
簡単な資料を事前に配布いたします。当日は、
積極的な質問を期待いたします。

高所登山委員会担当理事 川上 隆

蝦夷お月見会

北海道支部

北海道支部の「お月見の会」も
回を重ね十一回を数える。今年は
大沼国定公園を観月会場所に選定
した。

十月二日(土)、大規模年金保
養基地グリーンピア大沼のケビン
テラスに、十六夜の月が朧げなが
ら大きく照り出す頃、参加された
会員、家族、友人が出揃う。ケビ
ンとセントラルロッジの間の沢
に、すずきが微かにゆれる。佐々
会長の挨拶、浅利支部委員の司会
で皆さんのワンポイントスピーチ
に続き、酌み交すお酒、ビール、
ウイスキー、集会委員心尽くしのお
でんや、会員持ち寄りの肴に、メー
トルは上がる一方である。飲んで
騒いで、次は歌である。久保田、河
村両君のハーモニカに合わせ、佐
々会長のアルプス・ソングは一層
お月見会を盛り上げる。月が中空
高く皓々と冴え渡る頃、各々のコ

テージ、ケビンに分宿する。

明け方まで奮闘された紳士、淑
女も、朝、眩しげな眼で現われ
る。朝食は煮込みうどんと、じゃ
がいもの丸茹でが美味しい。

秋空は青く澄み絶好の登山日和
となり、駒ヶ岳を目指す。馬の背
で砂原岳、剣ヶ峰、火口遺跡と各
々のコースを辿り、午後二時過
ぎ、各地の会員と再会を約し帰途
についた。

参加者 佐々保雄、兼平治水、浅
利欣吉、柳田涼子、亀井秀子、遠
藤恵太、河村章人、河村皆子、河
村玲子、河村牧子、河村耕平、桜
井仁、桜井静江、桜井かほる、桜
井みちる、桜井ちづる、牧野昭
蔵、沢山賢一、今井三男、沢尻利
弘、佐々木喜一、紺谷友昭、山内
悟、土佐崇雄、成田志登美、木村
利雄、加藤高志、船場俊己、佐伯
節子、岡田市三郎、水科行雄、水
科美雪、横田春雄、久保田優一、
平野明。

ルーム日誌

(57年9月)

- 2日(木) 海外委、青年懇談会
- 3日(金) ビールパーティ
- 9日(木) 青年懇談会
- 10日(金) 科学研究委
- 13日(月) 高所登山委
- 14日(火) 会報編集委
- 16日(木) 図書委、青年懇談会
- 17日(金) 海外委歓迎パーティ
- 20日(日) フィールド

21日(火) 婦人懇談会

24日(金) 科学研究会

25日(土) パタゴニア研究会

28日(火) 自然保護委、婦人懇談会

30日(木) 青年懇談会

今月の来室者47名

会員移動(9月)

物故 脇坂 誠

444 田中 薫

8378 柳沢幸弘

8888 金子直美

退会取消 (旧姓山崎)

Wilson

Shiomi

原稿募集

山に関する原稿を会報編集委員会宛にお送り下さい。原稿の取捨は編集委員会におまかせ頂きますが、二百字詰原稿用紙(できれば一行を十五字詰にして)七、八枚程度。研究、随想、紀行、報告およびカットも含めフレッシなもの。

パールキャンプ申込方法

一九八二年十二月三十一日前までに申し込むこと。その内容は次の通り。

1、旅行社か山岳組織体の名称

2、プログラムに従ったキャンプの名称

3、登頂の予想される目標

4、参加者の総数(二人以上)

5、グループ・リーダーの名前と住所

宛先: Directorate of the International Mountaineering Camp, USSR, Moscow 119270, Luzhetskaja nab., 8

ケーブル: USSR, Moscow, USSR Sports Committee, "Pamir"

テレックス: 41304 KONKI SU

電話: 290-37-64

海外委員会・鈴木郭之

昭和五十七年十一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(03)四四三三三
振替口座東京三一四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂

会費未納
の方は至
急お納め
下さい

事務局